高杉晋作の愛した女

おうの

松本幸子

新人物往来社

松本幸子（まつもと・さちこ）
昭和6年4月28日，岡山市に生まれる。岡山県立操山高校卒業。昭和51年度岡山県文学選奨〈童話部門〉に入選，52年「劇団ひまわり」公募児童劇脚本で佳作入選。「閑谷の日日」が第二回歴史文学賞受賞。
著書『閑谷の日日』
現住所　岡山県岡山市築港栄町2－292

高杉晋作の愛した女 おうの

昭和56年10月10日　第一刷発行

著者　松本幸子
発行者　菅　英志
発行所　株式会社 新人物往来社

東京都千代田区丸の内3－3－1　新東京ビル
電話代表（212）3931　振替東京6－151643

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。（印刷　明邦・製本　小高）
（定価はカバー・帯に表示してあります）
Printed in Japan

高杉晋作の愛した女　おうの

松本幸子

新人物往来社

目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

馬関裏町　二
此の糸　一五
砲火の響き　二〇
逃げ出す　二六
離れ牛　二九
めぐり逢い　三三
免職　四〇
野山獄へ　四五
足かせ　手かせ　五〇

黒船再来　三三
和議　三七
一つ家に　三三
梅之進　三七
亡命　三七
探索の手　三五
望東尼　三九
堺屋の客　四四
死場所　八八

挙兵　九三
陣中三味線　九八
西洋へ　一〇三
慶応元年晩春　一〇六
道行き　一一〇
大坂　一一四
四国路　一一九
榎井村呑象楼　一二四
帰国　一二九

梅と桜と　一三四
夫婦　一三九
丈くらべ　一四四
絆　一四八
長崎みやげ　一五三
丙寅丸　一五七
紅喜　一六一
龍馬　一六六
去る　一七一

再会　一七七
捫蝨処にて　一八二
春の嵐　一八六
おもしろきこと　一九〇
吉田へ　一九三
なぶられぬこと　一九七
梅処尼　二〇〇
あとがき　二〇六

装丁・装画／岡田嘉夫

高杉晋作の愛した女　おうの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

馬関裏町

現在は下関市だが、幕末にはまだ馬関という呼び名が一般的であった。西廻り航路有数の商港として栄え、長州藩にとっては掛替えのない経済の窓口になっていた。

海寄りの町々には、回船問屋、船持ちの商人達の豪邸が軒を連ね、港町には欠かせない遊里も、ずいぶんと賑わいをみせていた。遠く源平の昔、壇之浦で亡びた平家の女官達が、春を販いだのに端を発すると伝えられる稲荷町遊廓は、その最たるものであるが、他に、裏町というのもあった。

間口十間などという大見世が妍を競う稲荷町とは違って、こちらはせいぜい間口が二、三間という、小料理屋とも妓楼ともつかぬ軒の低い小見世が、格子を竝べてひしめき合っている。「堺屋」は、その裏町の一角、日蓮宗本行寺の山門近くにある小見世であった。

安政三年（一八五六）八月も終りに近い、夏の名残りの濃い昼下りであった。

堺屋に出入りしている女衒の文吉が、一人の小娘を伴って見世にやって来た。年の頃は十一か二、ぽってりとした肉付きの、色の白い娘であった。

堺屋の主人新蔵は、女房のお喜久に、晩い昼食の膳を片付させると、文吉と小娘を、内証とよばれる自分の部屋へ請じ入れた。

「名はなんというんや」

新蔵が、その頃の京坂以西の名だたる遊里では、流行りのようになっていた上方訛りで尋ねた。

「おうの」

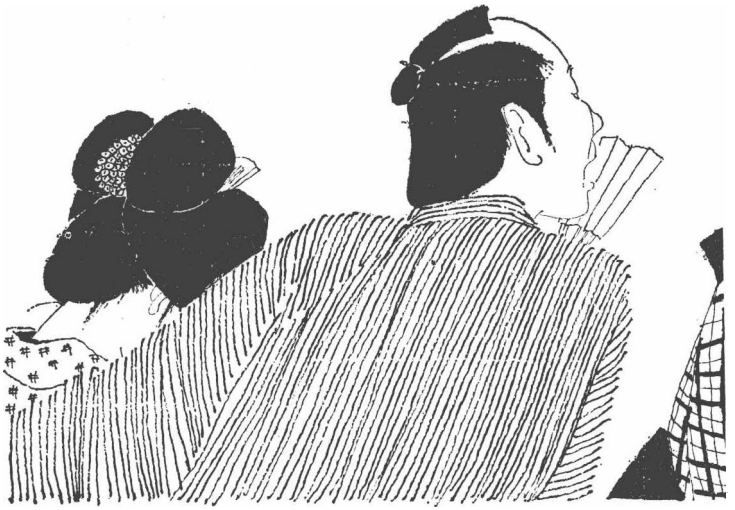
小娘は、二重まぶたの涼しい瞳を新蔵に向けると、やや受け口の下唇を突き出すようにして、おっとりと答えた。

「おうのか」

新蔵はうなずくと、はだけたふところに団扇で

風を送った。
「ほんで齢は」
「十二どす」
「この娘、上方訛りやないか、生まれは京都か」
側からお喜久が訊いた。おうのはかぶりを横に振ってみせた。
「なんや、違うんかいな」
おうのがまたかぶりを横に振った。
「どっちゃや」

新蔵がじれていう。
「ああ、それはだすなあ」
文吉が助け船を出した。
「実はこの娘、自分の生まれ知らんのだすわ」
「知らんてか」
お喜久は、おうのをちらと見やると、
「ほなここが」
と自分の頭を指さしてみせた。
「いいえ」
文吉はあわてて手を振った。
「この娘のはなしでは、小さい時から、あっちゃこっちゃ旅して歩いたさかい、どこで生まれたんかようわからへんというんだすわ」
「親から聞いてへんのかいな」
お喜久がいう。
「旅芸人か行商人の娘なんやろな」
新蔵はひとり合点すると、
「それはそれでええけどな、おまえこの娘をどこから勾引してきたんや」



と文吉の方を向いた。
「勾引しやなんて旦那、めっそうもない」
「正直に吐いてしまわんかい。おまえいまなんというた。この娘のはなしではというたやないか。ほな、この娘の親にはじかにおおてへんことになる。勾引しでのうてなんや」
「かなわんなあ旦那には……」
文吉は頭を掻いた。

馬関では、毎年八月になると、朔日から三日間、海峡に面した高台にある亀山八幡で五穀祭が行われる。食物を売る屋台店なども数多く出て、境内は参詣人でごった返す。
祭礼の日文吉は、群集に揉まれて、石段わきの玉垣に押しつけられ、身動きできなくなっている小娘を見付けた。
「上玉やで」
そう独言つと、文吉は群集をかき分けて、娘に近づいた。

「連れはおらんのか」
尋ねてみると、親にはぐれて捜しているのだという。
「こんなところで待ってたかて、人に押されるばっかりや、わしの家に来てひと休みしてから捜したらええ、わしも手伝うさかいに」
親切ごかしにいって、文吉は、些しも警戒心を示さない小娘を、らくらくと自分の家へ連れてきてしまったのである。

「それがこのおうのやいうのやな、そやったらやっぱり勾引しやないか。後で親が捜し当てて、ごたごたするのかなわんで、今すぐ連れて帰り」
けんもほろろに新蔵にいわれ、
「旦那、そんなこといわはらんと、この娘もよう納得してますのやよって」
文吉は拝まんばかりにいった。
文吉はこれでも一応、約束通りおうのの親捜しに協力したのである。むろん見付からぬように念じながらではあったのだが。結局捜し出せず、しばらく自分の家におうのを泊めた後、裏町で働くことを持ち掛けてみると、これが意外にもあっさり承知をしたのだという。
「そんな阿呆な、裏町で働くことがどんなことか、この娘にはようわかってへんのや」
お喜久は本気にしない。
「そやなかったら、やっぱりここがおかしいのやで」
文吉と新蔵夫婦の間に、しばらく押問答が続いたが、結局おうのは、堺屋に買い取られることに決まった。勾引しなどと文句をつけたのは、安く買いたたくための新蔵の方便であって、文吉に連れられて見世に入って来た時から、新蔵はおうのの器量のよさに目を付け、内心では疾うに買うつもりになっていたのだった。
十年という年季奉公がおうのに課せられ、いくばくかの金子が親代りとなった文吉の手に渡った。しかるべき証文も形通り取り交わされて、お

うのは正式に堺屋の人間になったのであったが、当のおうのは、そんなことには全く無関心といった風に、もの珍しげに部屋の中を見廻しているだけである。

「やっぱり頭がちょっと……」

お喜久は、またしても頭をひねるのであった。

此の糸

おうのは堺屋で働き出した。

おうのの一日は、朝の掃除、先輩遊女達の下着類の洗濯から始まる。それが終ると、三味線と踊りのけいこに通う。

稲荷町にあるような大見世には、三味線師匠と称する抱えの芸者が一人や二人は必ずいて、遊女達に三味線や踊りの手ほどきから、廓のしきたり、作法など一切を教えるのであるが、堺屋のような裏町の小見世には、そんな者を置くゆとりはない。同じ裏町の「中清」という見世にいる三味線師匠のところへ、おうのや他の見世の、いわゆる下地っ子達は、けいこに通うのである。

けいこから帰ると、夜は夜で客のために、二階の部屋のあちこちに酒肴を運ぶ仕事が待っている。

堺屋には、一人前に客の取れる遊女が三人、下地っ子が二人いた。おうのを入れて都合六人である。

「あの娘、ひょっとしたら親に捨てられたんと違うやろか」

見世を開けるにはまだ間があるという昼下り、お喜久が、帳付けに余念のない新蔵にいった。

「あの娘て、おうののことか」

「へえ」

「なんぞおまえにいうたんか」

「いいえ、あの娘、親のことはなんべん尋ねたかて、ひとともいわしまへん」

親にはぐれたのであれば、少しは親を恋しがる素振りを見せるはずである。ところがおうのは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.